

種文学賞 令和六年第二回目 作品集 下卷

令和六年第二回目の種文学賞は、

目次

- ・ 小学三年生の部「夏のおすすめのすごし方」
 - ・ 小学四～六年生の部「地の文をつくろう レベル1」
 - ・ 中学一～二年生の部「地の文をつくろう レベル2」
 - ・ 中学三～高校生の部「地の文をつくろう レベル3」
- というお題で作品をつくり、最終的に全十七名による力作がそろいました。

この下巻では、中学一～二年生の部および中学三～高校生の部の作品の発表と、受賞者の発表、また山分による講評こうひょうを掲載けいさいしています。

〈中学一～二年生の部〉		
一	……	四ページ
くまさん	……	五ページ
こんぼた	……	六ページ
チェチェズ	……	八ページ
ドイル	……	九ページ
マツタケ	……	十ページ
〈中学三～高校生の部〉		
じけまち	……	十二ページ
〈受賞者発表〉	……	十四ページ
〈講評〉	……	十五ページ

◆◆ 中学一〜二年生の部 ◆◆

この部は、小学四〜六年生の部と同じく「地の文をつくろ
う」がお題です。しかし、こちらは題材となる会話文がちが

ますし、地の文のつくり方に次の二つの条件も加わっています。

①各会話文の前後すべてに地の文が入るようにすること。

②登場人物以外の事物について語る地の文を少なくとも一
か所はつくること。

特に②の条件については、みなさんにこだわってもらいまし
た。作品をご覧になるうえで、ぜひこの点に注目してみてください
さい。

〈今回の会話文〉

「エマちゃん、元気なかったね」

「そうだね。」

「何かあったのかな。知ってる？」

「…う、ううん、わたしは何も。」

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

「…そうだね」

作者 一（中一）

〈これまでのあらすじ〉

エマと六美^{むつみ}と四葉^{よつば}は保育園のころから仲良しだった。その中で一番元気なエマが今日はその元気がなかった。それに気付いた六美は四葉に理由を知らないか聞きながら放課後帰ることにした。

夕暮れまで遊んだ六美は帰り道四葉と一緒に帰った。いつもは明るい道だが、エマがいないから少し暗く感じた。足並みをそろえて歩いて六美は口を開いた。

「エマちゃん、元気なかったね」

四葉は、その言葉を聞きドキッとした。そして

「そうだね。」

と一テンポ遅れて言った。それが気になった六美は言った。

「何かあったのかな。知ってる？」

その時に冷たい風が吹いた。六美にはその風が秋だと感じられた。四葉はその風が心をいたませた。実は、四葉はエマが元気がない理由を知っている。その理由はエマと誕生日も同じだった愛犬が死んだことだ。なぜ四葉は知っているかという電話で四葉の母とエマの母がしゃべっているのをぬすみ聞きしたからだ。母から本人の許可なしで言ったらいけないと言われているから六美には言わないのだ。そして四葉は

「…う、ううん、わたしは何も。」

とがんばって知らない風^{ふう}を装って言った。六美は気になったがこれ以上聞いてもむだだと思った。

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

と六美は心配そうに言った。四葉は六美がとても心配しているの
わかった。四葉も心配する気持ちがさらに強くなった。

「…そうだね」

そして二人は無言で帰っていった。

作者 くまさん (中一)

〈これまでのあらすじ〉

マユとエマとユミで買い物に行ったときおそろいのキーホルダ
ーを買いランドセルにつけた。帰る前エマがランドセルを見る
とキーホルダーがこわれていた。次の日学校でエマの元気がな
くマユとユミは心配になった。

エマちゃんの元気がなく心配になったマユとユミは昼休み教室の片

かた

すみで話し合っていた。今日は担任の先生が病欠で代わりに学校一

こわい先生がきたため、教室は一段と静かだった。

「エマちゃん、元気なかったね」

とマユは周りの人たちに聞こえないよう小声で言った。

「そうだね。」

ユミは顔を下におけながら床をじっと見ていた。

マユは

「何かあったのかな。知ってる？」

とユミに聞いた。

「…う、ううん、わたしは何も。」

顔を上げ首を横にふりながら自分は何も知らないと言まかした。だ

が心の中ではエマちゃんの元気がないのはエマちゃんのキーホルダー

をこわしてしまった自分のせいだと感じていた。

「そっか。なんでもないといんだけど…」

マユは自分の手をにぎりしめエマちゃんが元気になるよう心の中で願った。

ユミはまた顔を下げ少し落ちこんだように

「…そうだね」

とつぶやいた。

作者 こんぼた（中一）

〈これまでのあらすじ〉

小学五年生の純恋すみれはエマが母親を亡くなしていることを知らずに母親の話をしてしまう。後から別の友人にエマの家庭事情を聞いた純恋はうしろめたい気持ちになる。そして、純恋は仲良しの蓮れんと共に公園に来ていた。

いつものブランコに座ったとたん蓮くんが放った言葉は思いもよらぬものだった。

「エマちゃん、元気なかったね」

先ほどまで遊んでいて、忘れかけていたうしろめたさが思い出される。あたりは静かでブランコのゆるるギイという音だけが響いた。

「そうだね。」

動揺を隠せただろうか。自分の心臓の音が速くなってきていることがよく分かる。

「何かあったのかな。知ってる？」

もちろん知っている。私がエマを傷つけたのだから。傷つけるつもりなんてみじんも無かったのに。蓮くんの本心からきているであろうこの質問に少しいらつく。罪の意識なく放っている。この言葉で私が勝手に傷ついているだけなのだが。

「…う、ううん、わたしは何も。」

エマにはきつと嫌われたらうから、蓮くんには嫌われまいという一心でウソをついてしまった。私がエマを傷つけたと知った時、蓮くんはどのような気持ちになるのだろうか。怒るのか、悲しむのか。ほおをなでた夏特有の生温かい風がとても気持ち悪く思えた。

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

エマを心配する蓮くんを見ると、罪無き言葉の罪深さを感じる。私もエマに同じことをしたのだけれど。そんなことを考えていたら視界がゆらいできた。

「…そうだね」

のどからようやく出てきた言葉はか細いものだった。蓮くんが不思議そうな顔を向けてくる。私が泣いているからだろうか。いらだちとうしろめたさと悲しみを抱えた私はブランコから立ち上がると全力でかけ出した。空は、私の気持ちと相反してあいはんきれいな青色だった。

作者 チェチエズ（中二）

〈これまでのあらすじ〉

ヘリンは、リマがエマに暴言をはいていじめていた所をお昼休みの教室で見た。ヘリンとハニとエマは同級生で親友であった。ヘリンが現場を見た翌日、ヘリンとハニが英語の時間中にエマのことをしゃべっていた。

ハニは、

「エマちゃん、元気なかったね」

と心配そうな表情で、ヘリンに話しかけた。

ハニが言ったことにヘリンが返した。

「そうだね。」

昼休みの出来事がヘリンにとってすごく悲しい。

ハニは暗い様子のヘリンを見て

「何かあったのかな。知ってる？」

とヘリンに聞いた。

「…う、ううん、わたしは何も。」

ヘリンはエマが暴言を吐かれていじめられているのを話すこと自体がいやだった。

ハニはヘリンがエマの事を何か知っていると思ったが、

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

とせんさくしなかった。

ユミはまた顔を下げ少し落ちこんだように

「…そうだね」

ヘリンは、そう言った声がふるえていた。

その時、教室が静かになった。グループワークの時間が終わったか

らだ。先生が話し始めたのでハニとヘリンの雑談は終わった。

作者 ドイル (中二)

〈これまでのあらすじ〉

北小四年のカオリはある日の放課後、誰もいない教室にいた。カオリは窓側に置いてある生徒達が作った作品の中でエマがおかあさんに作ったコップを割ってしまった。カオリは顔を青ざめてその場を立ち去った。

次の日の放課後、学校の帰り道でカオリはユキに話しかけられた。

「エマちゃん、元気なかったね」

カオリは何も知らないような顔で答えた。

「そうだね。」

カオリは昨日自分がやってしまった事と、今日のエマの表情を思い出し、下を向いた。

「何かあったのかな。知ってる？」

カオリはびくつとし、青ざめた顔で言った。

「…う、ううん、わたしは何も。」

ユキは少し残念そうな顔になった。

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

カオリは心配するユキを見て、しばらくだすような声で言った。

「…そうだね」

かすかに震えるカオリの頬に一粒の雨粒が落ちた。

作者 マツタケ（中二）

〈これまでのあらすじ〉

六甲女子中に通う仲良し三人組リコ・マリ・エマは、いつも陽気で、クラスの人気者である。今日の学校でエマは、いつもと違い静かだった。エマは一人で帰ってしまったためエマとリコは二人で話しながら帰っている。

リコは今日のエマがとても静かであったということを思い出し、エマが大丈夫か不安になってきた。

「エマちゃん、元気なかったね」

マリは考え深そうな目でリコを見た。そのまゆは少し下に下がり、さびしそうだった。

「そうだね。」

リコは学校のテストでいつも満点をとっている頭の良いマリが、今日エマの元気がなかったことについて何か考えてくれていたのかと思っただ。リコには今のマリの険しい顔つきはまるで、有名な本である「シャーロックホームズ」にでてくるホームズのようで、たのもしく見えた。「何かあったのかな。知ってる？」

けれどそう聞かれたマリは、少しあせった。なぜならエマが元気の無い理由を知っているからだ。それは、エマが父親の転勤のために引っ越すということだった。そのことをマリは母親たちの会話の中で聞いてしまっていた。ただこのことを、まだ何も知らないリコに言うてはならないと考えて誤魔化した。

「…う、ううん、わたしは何も。」

リコは明日からまたエマが元気になって学校に来てほしいと願った。

「そっか。なんでもないといいんだけど…」

マリは、まだ何も知らないリコにとっては、とても不安なことなんだろうな、と思っていた。そのため事実を言おうか少し迷ったが、やっぱり今のリコにこのことを言ってしまうと、まずいと思い、やめた。

「…そうだね」

そうマリが言ったとき、強い風が吹いて、桜の花びらが散った。それを見たマリは、もう桜の花びらとその木が出会えないように、私達とエマも会うことができなくなってしまうかも知れない、そのような不安にかられた。マリは、急にエマに合いたくなくなり、リコを置いてエマの家に走り出した。

走っているときには春の夕日にマリの涙が照らされていた。道中のコンクリートにはその涙が染みこんでいた。

◆◇ 中学三〜高校生の部 ◆◇

この部も「地の文をつくろう」がお題でした。地の文を加える会話文も、中学一〜二年生の部と同じものです。

ただし、これまでの部と異なるのは、自分の創作した地の文に対して、どのような点に力を入れたかをアピールする文章も書くという課題が加わっているところです。

しかしながら、この部は今回作品提出が一名のみになってしまったのと、しかも提出作品も締め切りに間に合わなかったため、選考からは外れてしまいました。ただ、せっかく書いてくれた力作をみなさんにもご覧いただきたいので、ここに掲載させていただきます。

作者 じけまち (高二)

〈これまでのあらすじ〉

エマちゃんは朝から仲の良いめいとけんかして落ち込んでいた。普段は元気なのに今なぜ元気がないのかずっと気になっていた。たけしは学校の帰り道にめいを見かけてなぜエマちゃんに元気がないのか聞くことにした。

下校しているめいを見つけたたけしはかけより

「エマちゃん、元気なかったね」

と話しかけた。めいは悲しそうな表情で

「そうだね。」

と答えた。

たけしは少し考えてから

「何かあったのかな。知ってる？」

と聞いた。めいは少し返答にまよった顔をしながら

「…う、うん、わたしは何も。」

と首を振った。今ふれるべき所ではないと気づいたたけしは聞いたこ

とを少し後悔しつつ

「そっか。なんでもないといんだけど…」

と答えた。

めいは愛想笑いをして

「…そうだね」

と答えて足早に走りさった。

(力を入れたところ)

地の文を作るにあたって読み手の人が様子や動作をイメージしやすいように書きました。日常の中でめいのように詮索せんさくされたくないことがあるときに、たけしのように質問してくる人がいたらどういう態度や表情になってしまっだろうかと考えました。物語は目に見えるものではないので、心情がわかりやすくなるように工夫しました。めいにたけしがエマについて質問された時に「返答に迷った顔」や「愛想笑い」など表情を描くことで心情が読者にわかるようにしました。また、「足早に走りさった」という言葉でめいの気まずさを表現しました。普段はあまり使うことのない「足早」などという言葉を使って書く機会ができてよかったです。

◆ ◆
受賞者発表
◆ ◆

じゅしやうしゃはつぴやう

今回は、小学三年生の部から一作品、小学四～六年生の部から一作品、中学一～二年生の部から三作品が佳作対象となりました。そしてその四作品のなかですぐれている二作品を優秀作品とし、さらにそのなかの一作品を大賞として選出しました。

【佳作】

しようぎマン（小学三年生の部）

ドラゴン（小学四～六年生の部）

一（中学一～二年生の部）

【優秀作品】

マツタケ（中学一～二年生の部）

【大賞】

こんぼた（中学一～二年生の部）

◆ 講評 ◆
こうひょう

小学三年生のみなさんは今回が初めての種文学賞のちよ
せんとなりました。夏休みをまたぐ時期だったので、夏のおす
すめについて書いてもらう内容にしました。三人が出してくれ
ましたが、みなさんそれぞれ本当にいっしょうけんめい書いて
くれました。佳作かさくにえらばせてもらった「しよぎマン」さん
の文章は、三つの作品のなかでいちばん説得力せつとくりよくがあると感じ
ました。その点でほかの二人よりすぐれていると思います。た
だ、「さくらっキー」さんは「そこでビーチボールを投げたらつ
めたい水がはじけます。つめたい水がはじけるともつと楽しめ
ます。」という表現ひょうげんがうつくしかったですし、すいかわりの
説明せつめいもじょうずでした。「ブルームーン」さんも、あんなにたく

さんのことを書いたのがすばらしいですし、また、さいごのし
めくくりの部分はなかなかあのように書けるものではないの
で、とても感心しました。

小学四～六年生の部からは種たねの名物「地の文をつくろう」に
チャレンジしてもらいました。この課題はとにかく、〈会話文だ
けでは見えないものを見えるようにする〉という地の文の役割
を意識することをがんばってもらう課題です。小学四～六年生
の部で、それが最もできていたと思った作品が「ドラゴン」さ
んのものでした。登場人物の一人の「れん」が、木の枝にひっ
かかったボールを回収したあとの「れんは木に登ったまま、ほ
おを赤くして言った。」という表現や、そのすぐ後の「りゅうも
ガッツポーズをして」という表現がそう感じさせてくれたとこ
ろです。これらの表現があることによって、場面の中での登場

人物たちの様子がとてもあざやかにうかび上がってきたと感じます。また、会話文と地の文のからみ方が、他の作品とくらべてぎこちなくなっていなかったのも良かったです。

中学一〜二年生の部は、地の文をつくる上での条件として、必ず登場人物以外のものに触れるということがありました。いわゆる「情景描写」を入れるということです。しかもこれは単に風景やその場にある物を書くだけではなく、その描写が物語の演出に一役買っているようにすることを目指してもらいました。その観点で、「一」さんの作品は、秋風の描写「六美にはその風が秋だと感じられた。四葉はその風が心をいたませた。」がとても効果的だと思いました。これによって、その後に語られる六美と四葉の立場の違いが印象深く演出されています。短い文をたたみかけるような書き方もここではとても似

つかわしいものになっていると思います。

「マツタケ」さんの作品は、何といっても最後にある桜の花びらの描写です。卒業シーズンに花を咲かせる桜が別れのモチーフになることはよくあると思いますが、木から離れていく花びらを別れの象徴に用いるという考え方はあまり多くないのではないかと思います。私にとってはとても新鮮なものでした。また、途中にある、マリの表情をシャーロックホームズになぞらえているところも技ありの一手であると思います。

そして、今回非の打ち所がない作品を出してくれたのが「こんぼた」さんでした。まず情景描写について言えば、「あたりは静かでブランコのゆれるギイという音だけが響いた。」「ほおをなでた夏特有の生温かい風がとても気持ち悪く思えた。」「空は、私の気持ちと相反してきれいな青色だった。」という三か所用

意されていますが、このどれもが物語にとって重要な役割を果たしており、なくてはならない要素になっています。

特に、三つ目の空についての描写は、「こんぼた」さんがこの物語のなかに与えた「罪なき言葉の罪深さ」という主題に通じるものでした。この、主題をすえて場面展開を考えてくれたというのも、「こんぼた」さんの作品を高く評価した要因です。主人公の「純恋」が悪意なく「エマ」を傷つける言葉をかけ、そしていまや彼女自身が「蓮」から同様の言葉を向けられて苦しんでいるという、非常に複雑な人間関係と心のゆれ動きが描かれており、情景描写がそれを過不足なく盛り上げています。

しかも、そのような物語の語りにも一人称視点（主人公が語る視点）を選んだのも、まったくもって正しい選択だったと言えるでしょう。あらゆる要素がからみ合って作品の価値を高めて

おり、高い文学性をもった内容になっていると感じました。

もちろん、おしくも受賞にいたらなかったみなさんの作品にも、それぞれかけがえのない個性こせいと魅力かりきがありました。今回もすばらしい作品をみなさんが手がけてくれたことをうれしく思います。みなさん、おつかれさまでした！

（山分大史）